創世記2－5章 「贖いの情熱」

1A 人の創造 2

1B エデンの園 1－17

2B 女の創造 18－25

2A 罪の始まり 3

1B 蛇の誘惑 1－7

2B 罪による呪い 8－24

3A 最初の殺人 4

1B 信仰と悪い行ない 1－16

2B カインの子孫とセツ 17－26

4A アダムからノアまで 5

本文

1A 人の創造 2

1B エデンの園 4－17

2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。神である主が地と天を造られたとき、2:5 地には、まだ一本の野の潅木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。2:6 ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。

神は再び、天地をお造りになった時の話をさかのぼって話しておられます。「経緯」とありますが、これはヘブル語で、「トルドット」と言って、家系、系図、歴史などを意味します。「～のその後の展開」という意味になるそうです。

先に、すでに神が人を造られたことを語られました。一度話したのに、なぜまた話すのか？という疑問を持つ人たちがいます。聖書には、しばしばこのような話の手法をとります。同じ出来事なのですが、初めに大まかなことを話し、それから同じ話しを今度は、ある点に焦点を合わせて再び見ていくことをします。ここでは、六日目の人間の創造を改めて見ている所です。そこで「まだ一本の野の潅木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。」とあります。1章では三日目のことですね。陸地はできたのですが、まだ植物が生えていません。そして興味深いのは、「霧が立ち上がっていて、雨が降っていなかった」ということです。この「霧」は地下水と訳すこともできます。つまり、当時は雨が降っていませんでした。

2:7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

それゆえ人間は「生きもの」となったとあります。霊をもった人となりました。人間が成り立っている三つの部分です。肉体と魂と霊を持っています。魂は今日の精神と言い換えることのできる部分で、意識の部分です。植物は体しか持っていません。動物は、意識はありますし、体もあります。けれども、動物には霊がないのです。神のかたちに造られておらず、ゆえに神の御霊と交わる部分がありません。けれども、人間にはあります。神の御霊は人の霊の部分において関わってくださり、それによって人は神とつながり、交わりを持つことができます。私たち人間のみが、「なぜ生まれたのか」という生きる意味を考えます。また、死んだ後はどうなるのかという永遠についても考えます。ただ食べて、飲んで、生きているのではないのです。

神は三位一体の方であります。神は、父、子、聖霊の三位一体の方であられますが、子が父の権威に服し、聖霊は父と子の権威に服します。そして人は、霊の部分で聖霊と交わりを持ち、そして霊が魂を動かし、そして肉体を支配するのです。

2:8 神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。2:9 神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。

エデンの園についての記述です。「エデン」は水で潤っているという意味があります。これから水の源となっている川が出てきます。主がここから水を流す起点としてくださっているんですね。それが「東の方」と書いてあります。モーセがこれを記述しています、メソポタミヤ地方であります。

興味深いことは、世の始まりにあったこの楽園が、世の終わりには東からの王たちが来る、ハルマゲドンの戦いの地域と重なることです。「第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。（黙示 16:12-13）」悪魔と悪霊どもがここにいるのですが、間もなくエデンの園にエバに対して蛇が現われます。その前には御使いケルブがエデンにいて、彼が堕落してそれが悪魔であったことをエゼキエル書 28 章 11-16 節に書かれています。

話を戻しますと、良い実を結ばせる木があり、それをいつでも、心の赴くままに食べることができました。主と心が一つになっていたので、自分の食べるものはそのまま神の御心にかなっていました。そして「園の中央」に二種類の木があります。「いのちの木」と「善悪の知識の木」であります。すべての至福の中央は神の命でありました。この方につながることができ、そこに永遠の命があり

ます。イエス様は、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストを知ることです。（ヨハネ 17:3）」と言われました。そしてもう一つ、「善悪の知識の実」は後で主が取って食べてはならない、と言われます。これが近くになるというのが、味噌です。人は神のかたちに造られたところにある、課題があります。それは神のかたちですから、神に似た者に造られているのですが、神ではないのです。神との命につながっているから、神のように万物を治める働きをします。しかし、神ではないのですから、神に自分を全て任せることによって初めて可能です。この交わり、いのちのつながりこそが大事であり、それで善悪を知ることは、徹底的に神に任せなければいけない、という絶え間ない選択が必要とされます。

2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。2:11 第一のものの名はピションで、それはハビラの全土を巡って流れ、そこには金があった。2:12 その地の金は、良質で、また、そこには、ブドラフとしまめのうもある。2:13 第二の川の名はギホンで、クシュの全土を巡って流れる。2:14 第三の川の名はヒデケルで、それはアシュルの東を流れる。第四の川、それはユーフラテスである。

ここからエデンの園の、だいたいの地理的位置をすることができます。川がエデンから出ていて、それが四つの川となって流れていますが、11 節の川が「ハビラ」の全土を巡って流れた、とあります。ハビラはアラビア半島の北部の部分です。後に、シェバの辺りから金が採掘される話が旧約聖書にありますが、シェバはアラビア半島にあります。そして、第二の川は「クシュ」に流れているとありますが、クシュはエチオピヤのことです。そして、第三の川は「アシュル」を流れているとありますが、これはアッシリヤのことで、イラクの北部です。そして「ユーフラテス」ですが、これはシリアの北部を上流とし、イラクの南部のバビロン、そしてペルシヤ湾に流れ込みます。

当時はまだ、ノアの時代の洪水による大地殻変動の前の状態です。ですから、今の地形とはかなり異なっているでしょうが、それでもおそらくイラクとシリアの北部の辺りであると考えられます。ここで大事なのは、その豊かさです。実をいつもむすばせている危機があり、園の中央から水が流れています。それによってその木々は潤っています。そして川が流れ、そこには金もあります。これが、神が初めに造られた人が住む所であり、終わりの日に、地上の神の国で実現します。エゼキエル 40 章以降にそれが書いてあります。神殿の聖所から川が流れ、それがどんどん深みにある川となり、死海に流れ着き、その海が魚がたくさん棲む生きた海となります。そして、実が結ばれ、それを食べることができます。それから新天新地には完全な形で実現します、黙示録 21-22 章にあります。都の中央、神と小羊からの生ける川があり、同じように実が結ばれ、葉が人々を癒します。このように神は共に住まわれ、その真ん中から水を、川を流されます。これは人の霊においても同じです。「ヨハネ 7:38-39 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注

がれていなかったからである。」

2:15 神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

人が労働を始めました。私たちが仕事とか労働と聞くと、何か否定的な思いが付きまといますが、それは3章以降に出てくる、罪を犯してしまった後のアダムに与えられた呪いです。もともとは、仕事は祝福に満ちたものだったのです。何かを任せられ、それを守るということです。

2:16 神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

「善悪の知識の木」が神と人との大事な境界線になっている部分です。「これを食べると必ず死ぬ」と主は言われますが、この木から実を食べることは、自分も神のように賢くなりたいという欲求を満たすことです。私たちは神のかたちに造られましたが、神のようになってはいかんのです。あくまでも神の器であり、完全になってはいかんのです。キリスト者が、自分がきちんと自分ができていないと嘆きます。けれども、自分が完璧になったらどうするのですか？それこそ、サタンです。完全なものになること、それがサタンの欲望でした。神はただ私たちがこの方により頼み、この方を信じることだけを求めておられます。神から独立して生きると、神から実際に独立します。神から引き離されます。そうすると、命の源である神の御霊から引き離されるので、人の霊はすぐに死んでしまうのです。ちょうど脳に少しの間でも血が循環しなければ、すぐに死に至るのと同じです。

そしてアダムが罪を犯して、呪いがこの地上に入ってきますが、同じように園においてその呪いを受け取ることを決意された方も、園におられました。ゲッセマネの園です。ゲッセマネとはオリーブなどを圧搾する意味がありますが、イエス様がまさに圧搾された、押しつぶされることを選び取ったところです。イエス様は、善悪の知識の木から実を取って食べたその結果を、ゲッセマネの園では神の怒りの杯としてイエス様が身代わりに受け取られました。主は十字架上で、「渇く」と言われました。それは私たちの罪を負っているところから来る渇きです。エデンの園では水があって潤っていましたが、罪を犯した魂は渇きで日照りになってしまいます。けれども、イエス様がそれを代わりに受けてくださったのです。そして、復活されたのも園であったことを覚えていますか？園の墓でした。主なる神は、ご自分の救いの働きにおいてエデンの園で失われたものを、キリストを園において贖いの働きをさせることによって回復させます。

2B 女の創造 18－25

2:18 その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」2:19 神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空

の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。

主が女を造られる時、男が「ひとりでいるのは良くない」ということでありました。神がご自身を「われわれ」と言われていました。交わりにおいて一体となっておられる神です。したがって、ご自分のかたちに造られた時も、ひとりでいるのは良くないと考えられました。それで女を造られます。そして、女は男の名を付けるという、もっとも管理や支配をする神のかたちとして最も創造的な働きをする時に、助け手、横にいて助ける人となります。

2:21 そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。2:22 こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。2:23 すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」2:24 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

神は女を造ってくださいました。女がどこから出てきたかが非常に興味深いです。「あばら骨」です。脇から造られたのです。夫婦における男と女の間には秩序があります。男がかしらとして立てられています。けれども、それは決して優劣の差ではありません。女も同じように神のかたちに造られた存在です。その証拠に、男の足からでもなく、また女が男を支配するかのように頭から造られたのではありません。脇から造られたのです。そそして、動物だけでなく女に対しても名を付けたのですが、これは日本語を読んだらさっぱり分かりません。ヘブル語で、男を「イシュ」と言います。そして女性形にすると「イシュア」です。「ア」という発音が加えられました。ですから、「イシュから取られたのだから、これをイシャと名づけよう」と言っているのです。

そして「ふたりは一体となる」とありますが、ここで使われているヘブル語が興味深いです。「エハド」です。「神がひとりである」という時も、この言葉が使われています。これは文法用語では「単複数形」と呼ばれます。同じ「一つ」でも一本の指と、一つの手とでは意味が違いますね。指の場合は単独で一本しかありませんが、手の場合はその中に五本の指があります。ですから、「一つの中に複数のものがある」という意味で、「単複数形」と呼ばれるのです。つまり、夫婦は一つの体になるのですが、その体にはそれぞれの人格があります。神が唯一であられるのに父、子、聖霊がおられるように、夫婦も二人で一つになるべく神が制度として設けてくださいました。そして、エペソ 5 章では夫と妻の結び合いが、キリストと教会の奥義を示しているとパウロは言っています。

英語では”one flesh”、「一つの肉となる」と訳されています。これは夫婦関係を持つことと共に、その結実である子息のことを意味しているのでしょう。子において夫婦が一つになっています。イエス様が、離婚についてパリサイ人たちに問い詰められた時に、ここの箇所を引用して、「人は、

神が結び合わせたものを引き離してはなりません。（マルコ 10:9）」と言われました。そしてその後に出てくる場面が、子供がイエス様に近づこうとしている場面です。弟子たちが親をしかっている時、イエス様はかえって弟子たちに憤られ、「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。（14節）」と言われました。離婚によって、もっとも犠牲を負っているのは子供です。

2:25 そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

ここの意味していることは、「彼らは隠すものが何一つなかった」と言うことができるでしょう。神の前に出ても、そしてお互いが会っても、隠し立てすることがなかったのです。これが、神の平和であります。全てが結ばれています。神と人とが結ばれています。男と女とが結ばれています。平和は、戦いがないだけではありません。戦争をしていなくても、互いに心が通っていなければ、壁があり、それは平和ではないのです。聖書の言う平和とは、結ばれていること、交わっていること、そしてそこから出て来る命の豊かさ、繁栄であります。

2A 罪の始まり 3

3章においては、「罪の始まり」が描かれています。もし、この出来事が起こっていなければ、聖書の残りの話はなかったことでしょう。ここで起こったことを、神がどのように対処してくださるのか、罪からの救いが神のご計画の多くの部分を占めています。

創世記3章を読む時は、次の二つの新約聖書の箇所を覚える必要があります。一つは、ローマ 5 章 12 節です。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、‥それというのも全人類が罪を犯したからです。」アダムの罪によって、世界に罪が入り、そして死が入りました。けれども、ローマ 5 章は続けて、キリストの正しい行いによって、信じる者が義と認められ、命が与えられるという恵みの支配を教えています。アダムにあって全ての人が罪を犯しましたが、キリストにあって信じる者には義が与えられるのです。（その他、もう一つの御言葉は、コリント第一 15 章 21-22 節）

1B 蛇の誘惑 1－7

3:1 さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

けれども、神の造られた獣の内で蛇がありました。一番狡猾であった、とありますが、これは蛇そのものが狡猾なのではなく、蛇によって現われたサタンが狡猾であるということです。先に引用したように、黙示録 12 章 9 節にこうあります。「こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。」この創世記に出てくる蛇のこと

を「あの古い蛇」と呼んでいます。そして興味深いことに、彼は「竜」とも呼ばれています。創世記 3 章に戻りますと、蛇が神から呪いを得た後に地を這うようになっています（14 節）。つまり、エバに語りかけた時には地を這っていなかったことが考えられます。したがって、蛇でありますが、同時に竜のように動いていたことが考えられます。

聖書には、竜の存在が出てきます。例えばヨブ記 41 章に出てくるレビヤタンは、海の中にいる火を噴く怪獣のような姿です。蛇は元々「輝くもの」という意味があります。私たちはサタンや悪魔のことを、真っ黒で熊手の槍をもった存在のように想像しますね。あれはミルトンの「失楽園」に出てくる悪魔で、聖書の描く悪魔ではありません。彼は輝いており、非常に魅力的でありました。「エゼキエル 28:12 あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。」コリント人への手紙第二 11 章 15 節に、「サタンでさえ光の御使いに変装するのです。」とあります。つまり見た目に良いもの、好ましいもの、自分が正しいと思っているもの、実際はそうではないのに、美しく見せるのが悪魔の仕業なのです。

3:2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。3:3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」3:4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」3:6 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

イエス様が悪魔について「偽りの父」と言われています。「彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。（ヨハネ 8:44）」神は真理でありますが、悪魔は偽りであり、エバを偽りで誘惑しました。

そして善悪の知識の木の本質とは何か？それは、人は人であり、神は神であるという区別です。人は神のかたちに造られましたが、神ご自身ではなかった。その境目が善悪の知識の木でありますが、それを越えるように仕向けたのが悪魔です。（イザヤ 14:13-14）そしてヨハネは第一の手紙において、世にある欲が3つあることを教えています。「2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」と言いました。「まことに食べるのに良く」は肉の欲です。そして、「目に慕わしく」は目の欲です。そして、「賢くする」は、暮らし向きの自慢です。英語では”pride of life”であり、人生における高慢な姿勢という意味合いがあります。これが罪の原因であり、自分で生きるという自分が力と知恵の源泉であるという考えです。

この三つの誘惑に負けたわけですが、希望は、私たちの主イエス・キリストです。イエス様も、公に活動を始められる前に悪魔から誘惑を受けられました。マタイによる福音書を開いてください。4章 1-11 節です。希望は、私たちの主イエス・キリストです。イエス様も、公に活動を始められる前に悪魔から誘惑を受けられました。マタイによる福音書を開いてください。4 章 1 節からです。

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。(1-11 節)

「石がパンになるように、命じる」のは「肉の欲」です。そして、「御使いが、手で支えてくれる」というのが目の欲です。それから、「国々の栄華をあなたに与える」というのが暮らし向きの自慢です。自分がいかに優れているか、栄光と称賛を人々から受けることが誘惑でした。けれども、イエス様はその一つ一つに神の御言葉によって対抗し、そして最後に「引き下がれ、サタン。」と言ってサタンを退けられたのです。したがって、私たちがイエス・キリストを仰ぎ見て、この方についていく時に、エバが受けたのと同じ惑わしに対しても打ち勝つ力が与えられます。

こうして女は惑わされ、男は罪を犯しました。聖書では女が罪を犯したとは書かれていません。なぜなら、直接、主の声を聞いていたのはアダムであり、女ではなかったのです。主に語られていることを聞きながら、それを違反したということが罪だったのです。そしてアダムが罪人の頭となり、全世界に罪が入り込みました。

3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

これは、彼らの霊が神から引き離された瞬間です。これまで神に拠り頼んでいたので見えなかった裸が見えるようになりました。彼らは神が言われたようにその場で死ぬことはありませんでした。けれども、実はこの時点で死んでいます。神は「必ず死ぬ」と言われた時に二つの死を意味してお

られました。霊的な死と肉体の死です。肉体の死は、後にアダムとエバが死ぬことによって実現します。けれども、霊的な死はここで神の御霊から離れてしまっているところから始まっています。ちょうど血液が存在していても、それが流れていないと即座に脳が死んでしまうように、たとえ霊があっても神との生きた交わりがなければすぐに死んでしまうのです。

そして彼らが取った行動が、「いちじくの葉をつづり合わせた」ことでした。いちじくの葉は、中東で葉が最も大きいものだと言われています。それを使って、覆いを作ったのですが、その後の話を読めばすぐ分かるように、神が来られたら、恥ずかしくてすぐに隠れました。ここで大事なのは、この文章の主語です。「そこで、彼らは・・・」とあります。罪によってもたらされた恥を、彼らは自分自身で覆おうとしています。自分自身で罪意識を取り除こう、罪を償おうとしているのです。言い換えれば、人の行ないによって救いを得ようとしている姿です。

2B　罪による呪い　8－24

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

「主の声」を聞いたとたんアダムとエバは恐れました。これが、罪がなせる業です。罪は、神と私たちの間に仕切りとなります。「あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ 59:2）」神が私たちを怒って、離れ去られたのではなく、罪があるために私たちが神に近づけないようになってしまったのです。

3:9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

ここの神の声をどう受け止めるでしょうか？恐い親父のように、「お前、どこにいる？」と怒っている声に聞こえますか、それとも、息子を失った、泣いている父親のように聞こえますか？真実は後者です。イエス様は、放蕩息子の喩えによって遠い国に行ってしまった息子を家の外でいつも待っている父の姿として神を描いておられます。

3:10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」3:11 すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」3:12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」3:13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」

罪は恥をもたらすだけでなく、恐れをもたらします。彼は恐れて、隠れました。罰を恐れていたのです。「1ヨハネ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」そして罪を犯したアダムは、その罪の性質をここでよく表しています。「責任転換」です。しかも、責任を神になすりつけています。「あなたが私のそばに置かれたこの女が」と言っています。女も責任転嫁をしています。蛇が惑わしたと言っています。私たちが何をもって悔い改め、罪赦されるのかというと、責任を認めることです。自分こそが神に対して罪を犯したということを知ることです。環境による被害者ではなく、神の救いの御手に対して、責任をもって「はい、私は救いを必要としています」と告白することです。

3:14 神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。

神は蛇に対する呪いを宣言されています。「塵を食べる」という言い回しは、卑しめられ、低められ、頭を上げることができないようにされている状態をしばしば、「塵を食べる」とか「塵を舐める」という表現をします（例：ミカ 7:17）。この卑しめられた、屈服した状態を示す比喩的な表現です。

3:15 わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく。」

ここに、初めのメシヤ預言があります。神は罪を犯したアダムとエバに対して、女の子孫によって悪魔が行なった、神と人を引き離す仕業を打ち砕く約束を与えてくださいました。「女の子孫」というのは、きわめて不自然な言い回しです。英語では”Seed”であり、日本語でいうならば「子種」です。精子とも訳すことのできる言葉です。したがって、聖書では「子孫」と言う時は父から出てきた子のことしか書いていません。ところがあえて神は、ここに「女の子孫」と言われているのは、これが人間の父と母の間に生まれた、罪の性質を受け継ぐ子ではなく、神から生まれる子を、女を通して与えるというメシヤ預言なのです。イザヤは、神から次の預言を受けました。7 章 14 節です。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」男を通してではない、処女によって男の子を生み、彼がイザヤ書 9 章 6 節によると、神の子であり、父なる神と一つである方なのです。したがって、ここは処女マリヤから、イエス様がお生まれになる預言です。

そして、この方が「おまえの頭を踏み砕く」とあります。蛇は尻尾を踏まれても何ともありませんが、頭を踏みつけられたらお仕舞いです。けれども蛇は、「彼のかかとにかみつく」とあります。これはキリストの十字架を指しています。悪魔は、キリストを十字架につけるよう仕向けることによって、彼の踵に噛み付きました。それは強い痛みが走ったことでしょう。けれども、しょせん踵なのです。

蛇をふり払って、その同じ足で蛇の脳天を打ち砕くことができます。「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。（ヘブル 2:14-15）」そして将来、私たちキリスト者が、この方にあってサタンを踏みつけます。「ローマ 16:20 平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」蛇の子孫とは、最終的には反キリストによって現われます。しかし再臨のキリストが彼の脳天を打ち砕きます。それによって千年後、悪魔自身も火と硫黄のいけに投げ込まれます。

3:16 女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

次は女についての呪いです。神は女が子を産む時、激しい苦痛がともなうようにされました。そしてもう一つの呪いは、夫からの支配です。女は男の助け手として造られました。女のかしらは男というのは神の秩序ですが、女が男の脇から造られたというのは、彼女が夫と共に歩む人であった、ということです。ところが、そこに乱れが起こりました。女は男との関係に満たしを求めようとします。男を自分のものにしたい、所有物にしたいと願います。「恋い慕う」というのは、ただ恋しいのではなく、自分の所有物にしたいという欲望です。

3:17 また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。3:18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

女は関係において呪いを受けましたが、男は仕事において呪いを受けます。神は男を、神が与えられたものを支配するという仕事を与えて祝福されました。けれども、その仕事において汗して働かなければいけないという呪いを受けます。仕事は本来、疲れないものでした。ただ私たちを充足させるものでしたが、アダムが罪を犯したことによって今のようになりました。

そして「土地は、いばらとあざみを生えさせる」と神は言われましたが、この時から世界は人ではなく悪魔の支配下に入りました。神は人に、地を従えよという祝福の命令を与えられましたが、人が悪魔の言うことを聞いてしまったために、その支配権が人から悪魔に移ったのです。その支配権を奪還するために来られたのが、私たちの主イエス・キリストです。主は、この地にある呪いを、

象徴的に、いばらの冠をかむることによって受けられました。「それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」（マタイ 27:29）」そして、イエス様はご自分の命という対価を払って、この世界を父なる神のもとに引き渡されたのです。

この呪われた状態を、パウロはローマ 8 章でこう述べています。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。（ローマ 8:19-22）」いま悪魔は、この地上に対して支配権を持っていません。いわば不法占拠です。しかし、ちょうど所有権を持っていないのにいつまでも居住している人たちがいますね。そのマンションやアパートをブルドーザーで破壊するなど強制退去を行政が行なうのですが、それがキリストの再臨です。イエス様が再び戻ってこられる時に、悪魔はこの世からいなくなり、最後はゲヘナ、地獄に投げ込まれます。

そして呪いは、「あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」という所にも表れています。私たちはこれを葬式で見るのです。日本ではほとんど全ての死体は火葬ですが、燃やされた死体は灰だけになってしまいます。土葬でも、死体は腐乱し、土の要素の中に分解していきます。しかし、これもキリストが来られたことにより、この罪と死の法則は逆転しました。三日目に墓からよみがえられました。もはや死ぬことのない復活の体をもって生き返られました。同じように、キリストにあって死んだ人々も、終わりの日に復活します。

3:20 さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである。3:21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。

ここに神の福音があります。人がいちじくの葉で自分の恥を覆おうとしてもできませんでした。それは人が自分の罪を自分の行いで取り除こうとする試みです。けれども、人にできなくなっていることを、神ご自身がしてくださいました。神が、彼らに着物を用意してくださったのです。それは葉ではなく、皮の衣でした。動物の命が取られ、血が流されました。神の、罪に対する罰がこの動物の上に置かれました。ですからアダムとエバがこれを見るときに、「私たちの罪は、ここで赦されたのだ。もうすでに血が流され、罪が洗い清められたのだ。」と実感することができたのです。これがキリストの血潮の力です。

3:22 神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」3:23 そこで

神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

「われわれのひとりのようになり」というのは、もはや神と人が一つになっていないことを示しています。彼らが神から離れて、独立してしまったことを意味しています。そして、「永遠に生きないように」と神は言われていますが、この罪のある状態で永遠に生きないように、という意味です。私たちが永遠に生きられると言われても、この体のまま、不完全な状態のまま永遠に生きたいとは思いませんね。

エデンの園は、ノアの時代の洪水の時までそこに存在していたようです。アダムとエバは、この近くに、東側に住んでいたのでしょう。けれども、エデンの園の入り口にはケルビムがいました。ケルビムは神の御座のそばで神を礼拝している、天使長のひとりです。エゼキエル書 1 章を読みますと、ケルビムは青銅と火の輝きがあります。聖書では、青銅や火は神の聖さから来る裁きを表していますが、そこに人間がそのまま近づけはたちまち滅ぼされてしまいます。後の時代、モーセに対して神は幕屋を造ることを命じられましたが、その入り口も東にありました。東の門を通って、祭壇でいけにえを捧げ、聖所、そして至聖所に入り、ケルビムが彫られている贖いの蓋、そして契約の箱のところで大祭司が血を振り掛けます。したがって、同じように当時はエデンの園が神を礼拝するところであり、神の栄光の臨在が輝いていた所でした。

3A 最初の殺人 4

4 章では、アダムによって入った罪が、確かに世界に広がっていく姿を見ます。

1B 信仰と悪い行ない 1－16

4:1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言った。

ここの「知った」は、性的に知ったということ、つまり夫婦の関係を持ったということです。そしてエバは、カインのことを「主によって、ひとりの男子を得た。」と言っていますが、ここをもっと正確に訳しますと、「ひとりの子、主を得た」になります。つまり、この男子が主である方、つまりメシヤのことを表しています。エバは前回私たちが読んだ、神の約束がカインによって実現したと思ったのです。悪魔のかしらを打ち砕く「女の子孫」が、この子であると思っていたのです。もちろん、その期待はすぐに裏切られます。創世記、いや旧約聖書はこれから、自分の子孫にメシヤを期待するようになります。ユダヤ人の女からメシヤが現れることを期待します。

4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者

となった。4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。4:4 また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

表面的に読めば、なぜカインのささげ物が受け入れられなかったのか、分からないと思います。けれども使徒ヨハネは、「1ヨハネ 3:12 カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょう。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。」と記しています。本文もじっくりと見てみましょう。

まず大事なのは、アベルの捧げ物に注目することです。「羊の初子」とあります。初めに生まれてくる雄の羊です。これは最も大切であり、価値のあるものです。これを神に捧げました。礼拝とは、自分の最も大切なものを、魂でさえも、すべてが神のものであり、主のものであることを告白する所です。なぜなら、神が真剣に、ご自分の子キリストを私たちに与えられることによって、私たちがどれだけ高価で尊いかを示してくださったからです。そして、「自分自身で、持ってきた」とあります。自分自身が神への礼拝に関わった、ということです。他の人に任せるのではなく、自分自身が神に近づきました。

つまり言い換えると、カインはこの二つのどちらも行なわなかったということです。地の作物の中でも、余剰のもの、取るに足りないものを捧げたのでしょう。そして、自分自身ではなく、誰か他のものに言いつけて捧げたのでしょう。自ら礼拝を捧げに来ていません。彼は、神に対して誠実ではなかった、神から心が離れていたのです。

そして、さらに根本的な問題があります。3章には、「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。(17 節)」とありました。ですから、土地から出てくる作物を神に捧げたこと自体が、神がすでに語られたことをないがしろにし、聞いていなかったことになります。彼は、自分の職業が農夫だったから、その自分の労力で作ったものを神の前で認められようとしていたのです。これが、自分の行ないによって神に自分を認めてもらおうとしている姿です。「私はこれまで、一生懸命やってきたのだから、それで構わないではないか。神がいるなら、それぐらい認めてくれよ。」ということになります。けれども、既に罪をもって生まれてきた者は、どんなに正しいと思われることを行なっていようとも、神の基準を満たすことはないのです。

ではアベルは、どうでしょうか？神はアダムとエバに。「皮の衣」を作って着せてくださいましたね。犠牲の動物によって神に近づくことができるという方法を神はすでに与えてくださっていました。アベルはこれをそのまま受け入れて、それで自分の羊から全焼のいけにえを取り、主に捧げたのです。それで主は彼の捧げ物を受け入れてくださいました。ですからアベルとカインの違いは、「信

仰」にあります。ヘブル書 11 章 4 節に、「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。」とあります。信仰というのは「狭い門」です。私たちのあらゆる努力は、神の前で無に等しいのです。ただ、キリストによってのみ、神の前に近づくことができることを認める必要があります。

カインは落ち込んでいました。「顔を伏せている」とありますね。自分で間違っていることを分かっていたのです。けれども、それを認めることをしたくなかったので、自分の心のうちにある憤りを内に閉まっておいたのです。カインの道とは、自らをへりくだらせない道です。罪を告白しない道です。そして神は、悔い改めの機会を与えておられます。「罪が戸口で待ち伏せしている。あなたを恋い慕っている。」これは、3 章にあった女が男を恋い慕う、と同じ言葉です。つまり罪がカインの心を自分のものにしたいと思っている、という意味です。けれども神は、かえってそれを治めなさい、と言われています。つまり、私たちが自分の思いにある罪を処理しないと、それが大きくなって、いつしか自分を支配するようになる、ということです。

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。4:9 主はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのでしょうか。」4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。

カインは悔い改めませんでした。心に苦みを宿していたので、殺意に至りました。そしてそれを実行したのです。使徒ヨハネが、カインの行ないは悪いと言ったのは、これです。兄弟を憎む者は人殺しをしている、と彼は言いました。そしてカインの道は、「嘘」にも表れます。これがこの世で最初の嘘でした。神はご存知です。神は、「どこにいるのか。」と聞かれた時に、彼にやはり罪意識を持って、自ら告白する機会を与えておられたのでした。

4:11 今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。4:12 それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」4:13 カインは主に申し上げた。「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。4:14 ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので、私はあなたの御顔から隠れ、地上をさまよい歩くさすらい人とならなければなりません。それで、私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう。」

アダムに対しては、汗水流して苦しみはあるけれども、そこから収穫物があることは話しておられました。けれどもカインは、その収穫物さえなくなると宣言されています。カインは、定住生活がもはやできなくなります。そして、カインは悔い改めることをせず、自分の身に起こったことに文句

を言っています。アダムとは異なりますね、彼は自分の罪によって畑を汗して耕さないといけなくなったことを知り、またエデンの園を出なければいけなかったことを知りました。そして、神の贖いを待ったのです。それが彼にはありません。これを「自己憐憫」と呼びます。

そして、殺されなければいけないという恐れがあります。つまり、すでにカインの他に人々がいたことが分かります。アダムとエバは何もカインとアベルを生んだ後に、誰も生まなかったということではありません。5 章 4 節には、息子たち娘たちを生んだと書いてあります。そして、彼が恐れたのは、自分がしたことによって自分もそのことが襲ってくると知っていたからです。蒔いたものを刈り取るということを潜在的に知っていたのです。

4:15 主は彼に仰せられた。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。」そこで主は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった。
4:16 それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。

神は、反抗したカインにさえ憐れみを示されました。七倍の復讐という「七」の数字は、神の数、完全数を示します。したがって、神が完全に彼を守られるとしたのです。しかしカインは、「主の前から去って」とあります。これは地理的なこともありますが、霊的にもそうでしょう。彼は、神からの守りは感謝していますが、神ご自身につながる気持ちはないのです。そして、アダムとエバの家族はエデンの園の近くに住んでいたと考えられます。彼らはエデンの園の東にいたのですが、さらに東のほうにあるノデの地に住み着きました。

このカインとアベルの話は、新約聖書に何回となく引用されていますが、イエス様は、神の預言者を殺して血を流したイスラエル人、そしてイエス・キリストご自身を死に定めたユダヤ人指導者に当てはめておられます。「それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復があなたがたの上に来るためです。（マタイ 23:35）」ヘブライ語の聖書、ユダヤ人の聖書は私たちキリスト教のものとは違います。創世記は同じですが、最後は歴代誌第二になっています。そこにザカリヤが出て来ます。初めから終わりまでの血の報復です。行ないによって、肉によって生きる人は、結局、信仰によって生きる人を妬み、迫害します。この相克はいつまでも続きます。

2B カインの子孫とセツ 17－26

4:17 さて、カインは、その妻を知った。彼女はみごもり、エノクを産んだ。カインは町を建てていたので、自分の子の名にちなんで、その町にエノクという名をつけた。

ここで神の言葉を信じていない多くの人は、「カインの妻はどこから出てきたのか？」と言います。この批評への回答は簡単です。先ほどの創世記 5 章 4 節、「アダムは・・・息子、娘たちを生んだ」

です。カインとアベルを生んだ後に、セツを生み、そしてその他にも娘たち、また他の息子たちを生んでいるのです。そしてカインが「町」を建てています。これは、神が言われたことに反することです。神は彼をさすらい人にするように定められたのに、彼はそれを嫌い定住して町を建てたのです。これは 10 章、ニムロデが町を建てていくこと、11 章でバベルの塔を建てていくことにつながります。これを言い換えるならば、「神によって守られるのではなく、自分で安全保障を作る。」と言ってよいでしょう。これが世の制度であり、神なしで自分を守るようにさせています。

4:18 エノクにはイラデが生まれた。イラデにはメフヤエルが生まれ、メフヤエルにはメトシャエルが生まれ、メトシャエルにはレメクが生まれた。4:19 レメクはふたりの妻をめとった。ひとりの名はアダ、他のひとりの名はツィラであった。4:20 アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。4:21 その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。4:22 ツィラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった。トバル・カインの妹は、ナアマであった。

カインの子孫から文明が生まれました。牧畜業、そして音楽、それから鉄鋼業が生まれています。最後の鉄鋼業は驚くべきことです。「鉄」は、人間の歴史の中で紀元前千年頃にならないと普及していないものです。イスラエルの初代王のサウルがペリシテ人と戦った時に、イスラエル人には鍛冶屋がいなかったという記述があります（1サムエル 13:19）。したがって、ノアの時代の洪水の前の時代は、原始的どころか、非常に文明が発達していたと考えられます。ところがカインの暴力の血は、子孫に受け継がれています。

4:23 さて、レメクはその妻たちに言った。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。4:24 カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」

文明が発達したと同時に、暴力が増し加わりました。ちなみに、この妻たちの名前、アダは飾るという意味で、ツィラは輝くという意味です。性的快楽も含まれた意味です。そして、レメクは自分を傷つけた若者を殺したことを誇って妻に自慢しています。神が復讐してくださると言われていたのに、自分の手で復讐することを豪語しています。これとキリストの命令を照らし合わせるとよいです。イエスはペテロに、七の七十倍赦しなさいと言われました。カインの道が復讐と暴虐ですが、キリストの道は赦しと平和であります。そして、このカインの子孫によって始まった文明と暴力が世界に満ちてしまった状態を、ノアの時代で見るようになります。

けれども神は、これであきらめたりなさいません。新たな子孫を与えられることによって、希望を絶やすことはなさいませんでした。

4:25 アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」4:26 セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。

アベルが死んでしまい、カインが去っていったので、神は新たに子を与えられました。「セツ」という子です。「土台」という意味です。エバはカインに希望を置きましたが、それは間違っていました。けれども、この子からメシヤが出る土台ができたと思っています。エバも神の救いについての計画をもっと理解しました。そしてセツの息子エノシュから、「主の御名によって祈ることを始めた」とあります。神に目覚めました。みなで公に礼拝するようになった、ということです。神の名を忘れることなく生きる子孫を神が残してくださったのです。このようにして、主はなんとしても、女の子孫であるメシヤを出すべく、贖いのご計画に情熱をかけておられます。

4A アダムからノアまで 5

このセツの子孫を創世記 5 章の系図の中で見ることができます。

5:1 これは、アダムの歴史の記録である。神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、5:2 男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。5:3 アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。5:4 アダムはセツを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ。5:5 アダムは全部で九百三十年生きた。こうして彼は死んだ。

「歴史」という言葉が始まります。これを先ほど話したようにヘブル語で「トルドット」と言います。アダムのトルドットです。一つは、「神に似せて人は造られた」ということです。しかし、「彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。」とあります。アダムは神に似せて造られたけれども、セツそれ以降の子孫は、アダムに似せて造られました。ここに、「罪の受け渡し」があるのです。DNA のようにして、罪の性質がアダムの罪によって受け継がれていきます。そこで、「彼は死んだ」という言葉が重みを持ちます。確かに、彼は長生きをしましたが、それでも死んだのです。人は元々、死ぬようには造られていなかった、永遠に神と共に生きるように造られました。それが許されなくなったのです。

この暗い影を残して旧約聖書の歴史は進みます。系図は、所々に出てきます。そして最後は、マタイによる福音書1章と、ルカによる福音書3章、すなわちイエス・キリストの系図で終わるのです。そしてこのアダムの系図は延々と旧約聖書の中で続き、新約聖書の最初のマタイによる福音書で終わります。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」です。イエス様は、「私はいのちであり、よみがえりです。わたしを信じる者は、死んでも生きます。」と言われたように、罪

をご自身の十字架によって取り除き、よみがえられ、それで永遠の命を与えられます。この恵みが、キリストの系図によって恵みと命が入ってきました。

アダムが千年近く生き、その他の子孫も長寿を全うしています。しかし千年を越えることはありません。私たちはここに、世界の終末も思わなければいけません。アダムがエデンの園を出てから、千年以上生きることはなかったのです。ここに、千年王国の意味があります。黙示録 20 章、キリストの再臨後に、千年間、キリスト者と患難時代の聖徒たちがキリストと共に地上を統治することが、書かれています。なぜ千年なのか？アダムによって失ってしまった、その期間の回復です。そして天地万物が崩れ落ち、新天新地に入り、永遠の都エルサレムで神と小羊キリストと共に住むことになります。

5:6 セツは百五年生きて、エノシュを生んだ。5:7 セツはエノシュを生んで後、八百七年生き、息子、娘たちを生んだ。5:8 セツの一生は九百十二年であった。こうして彼は死んだ。5:9 エノシュは九十年生きて、ケナンを生んだ。5:10 エノシュはケナンを生んで後、八百十五年生き、息子、娘たちを生んだ。5:11 エノシュの一生は九百五年であった。こうして彼は死んだ。5:12 ケナンは七十年生きて、マハラルエルを生んだ。5:13 ケナンはマハラルエルを生んで後、八百四十年生き、息子、娘たちを生んだ。5:14 ケナンの一生は九百十年であった。こうして彼は死んだ。5:15 マハラルエルは六十五年生きて、エレデを生んだ。5:16 マハラルエルはエレデを生んで後、八百三十年生き、息子、娘たちを生んだ。5:17 マハラルエルの一生は八百九十五年であった。こうして彼は死んだ。

まずここでは、名前の意味をご紹介します。「セツ」は「基礎」という意味。霊的な基礎を築いた人、ということでしょうか。エノシュは、「壊れやすい」という意味。人間の弱さを話しています。確かにエノシュにおいて、寿命が百年ぐらい短くなっています。そして、ケナンは「鍛冶屋」です。これは興味深いです、4 章 22 節、カインの系図において、トバル・カインが青銅や鉄の鍛冶屋であったとあるからです。つまり、ケナンはそのような世界の中で鍛冶屋としての職業を持っていた、ということになります。4 章と 5 章は同時期に、同居していたことを思い出してください。別々の世界ではなく、地理的、物理的には同じところにいたのです。これは、私たちが生きている世界でも同じです。肉の子孫に属しているのか、霊の子孫に属しているのか、同じ職業を持っていても全く意味が異なります。それから、「マハラルエル」は「神をたたえる」という意味です。主への賛美がこの時代に彼らの間で回復したのでしょう。そして「エレデ」は「守る、防御する」という意味です。

そして、ここで重要なのは、人の寿命のはかなさを示していることです。徐々に短くなっています。そしてノアの洪水後は最終的に、七十歳、八十歳の寿命に落ち着きます。詩篇 90 篇においてモーセが、そのことを歌いました（10-12 節）。

5:18 エレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。5:19 エレデはエノクを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ。5:20 エレデの一生は九百六十二年であった。こうして彼は死んだ。5:21 エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。5:22 エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。5:23 エノクの一生は三百六十五年であった。5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

エノクは死にませんでした。生きている時に神が彼を引き取られました。彼は、「神とともに歩んだ」とあります。神を信じて、神を生活の中にお迎えしながら生きていた、ということです。ところで、エノクという名前の意味は、「奉献」です。彼は神に自分自身を捧げた人でした。興味深いことに、カインの息子が同名でした(4:17)。そこでカインは町を建てていますが、いわば町を奉献するというような意味合いが込められていたでしょうか。この世に捧げる、あるいは神に捧げる、同じ名前でもそのどちらかに我が身を捧げているのかが問われます。

そして、エノクが神と共に歩み始めた時期を確かめると、「メトシェラを生んで後」ということです。彼の名前の意味は、「彼が死ぬとそれは送られてくる」という意味です。これは、来るべき水の裁きです。神から裁きが来ることを彼は前もって知ったのでした。その危機感から、主と共に歩む生活を始めたのでしょう。ヘブル人への手紙 11 章に、エノクが信仰によって神を喜ばせていたと書いてあります（5 節）。そして、彼は生きている時に、預言活動を行なっていたようです。ユダの手紙にこう書いています。「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。『見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』（14,15 節）」終わりの日に主が戻ってこられることを、先んじて預言していました。

そしてエノクは、洪水の裁きが来る前に天に引き取られましたが、同じようにキリスト者が生きたままで主に引き取られる約束が、テサロニケ人への手紙第一4章に書かれています。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（16-17 節）」そして、この言葉の後にパウロは、主の日、神の裁きの日のことを告げています。つまり、エノクと同じように、私たちが神と共に歩むことによって、この裁きの日が近いことを知って、それで神に引き上げられるということです。

5:25 メトシェラは百八十七年生きて、レメクを生んだ。5:26 メトシェラはレメクを生んで後、七百八十二年生き、息子、娘たちを生んだ。5:27 メトシェラの一生は九百六十九年であった。こうして彼は死んだ。

メトシェラは、この系図の中で最も長く生きた人です。彼の名前が先ほど申し上げたように、「彼が死ぬ時に、それが来る」というものです。彼の年齢を計算すると、ちょうど洪水の来る直前で死んだことが分かります。7 章 11 節に、「ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開かれた。」とありますが、計算すると、ノアが 600 歳の時に彼が死にました。

5:28 レメクは百八十二年生きて、ひとりの男の子を生んだ。5:29 彼はその子をノアと名づけて言った。「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦労しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう。」5:30 レメクはノアを生んで後、五百九十五年生き、息子、娘たちを生んだ。5:31 レメクの一生は七百七十七年であった。こうして彼は死んだ。5:32 ノアが五百歳になったとき、ノアはセム、ハム、ヤペテを生んだ。

レメクは、「兵士、征服者」という意味ですが、これはカインの子孫、レメクと同じ名前です。カインの子孫のほうのレメクがその時代の有力者だったのでしょうか、それにちなんだ名となっていますが、彼はむしろ「安息」を求めていました。それで、彼がノアを生んだ時に、「この子は慰めを与えてくれるだろう」と言っています。

この子がメシヤかもしれないと期待していたからです。「この地を呪われたゆえに、私たちは働き、この手で苦労している」というのは、覚えていますか、神がアダムに対して与えられた呪いです。この呪いから解き放たち、慰めを与える方、つまりメシヤが来られたと思いました。エバがかつて、カインに期待をかけたのと同じです。もちろんノアはメシヤではありませんでした。けれども、確かにノアによって、新しい世界が始まり慰めを得ることはできました。そして「ノア」という名前の意味は、「休み」あるいは「慰め」です。

このようにして、贖いの歴史は進みます。主は何とかして、何とかして悪に傾く者たちの中から人々を救われようとしています。この心を知ることができましたでしょうか？今、皆さんはどちらにおられるでしょうか？カインのように、神の救いとその恵み、気前良さを拒んでしまうほうでしょうか？それとも、アベルのように、神の犠牲の子羊、キリストによる血の赦しを受け入れたいと願うでしょうか？セツの子孫のように、主の名によって祈りたいと願うのでしょうか？